

Brame の *Realistic Grammar* について

鈴木 憲 夫

0. 序

Brame は統語論に関する最近の論文及び著作において、より ‘realistic’ である ‘lexically based grammar’ を主張し (Brame (1978, 1979, 1980, 1981) などを参照), Chomsky and Lasnik (1977) と Chomsky (1980) などに対して鋭い批判を行なっている。特に, Chomsky and Lasnik (1977) の種々のフィルターは、個々の語彙項目に関する語彙的下位範疇化制限 (lexical subcategorizational restrictions) から必然的に出て来るものであるとし、文法におけるフィルターの不要性を主張している。すなわち、フィルターによって扱われる現象は、すべて機能的逸脱 (functional deviance) の特殊な場合であるとしている。さらに、Brame は Chomsky (1980) の Case filter は同様の理由によって不要であると主張している。

ところで、Chomsky の “Remarks on Nominalization” (Chomsky (1972) を参照) の出現以来、それまでの変形万能主義的な傾向は是正され、語彙論的仮説 (lexicalist hypothesis) とよばれる立場が導入された。その後、Chomsky 自身は移動規則に関する痕跡理論 (trace theory of movement rules) の開発を経て、「範疇 α を動かせ」(‘Move α ’) を含むような核心文法 (core grammar) の整備へと傾いていったのに対し、Bresnan (1978), Brame らは、より radical な lexicalism の立場をますます明確にしていった。特に Brame は、変形規則 (transformational rules) ばかりでなく、句構造規則 (phrase structure rules) をも廃止し、個々の語彙項目に関する機能表

示 (functional representations) と若干の構成規則 (rules of composition) とによって語彙項目の連鎖を直接に機能構造 (functional structures) へと写像するわく組を提案し、事実上 lexicalism の最極端に位置している。

本論文では、最近の lexicalism の主唱者の代表として Brame に焦点を合わせ、その文法における若干の前提 (assumptions) から生じるとされる諸問題を扱おうと同時に、経験的諸点に関して Brame の 'surface approach' から必然的に生ずるとされる問題点等を指摘する。また可能な場合には、Chomsky に代表される痕跡理論を含む拡大標準理論との比較も試みる。

1. Brame の方法について

Brame (1978; pp. 45, 72) の段階では次のような句構造規則が採用されている。

- (1) a. $\bar{S} \longrightarrow \left\{ \begin{array}{c} \text{COMP} \\ \overline{\text{NP}} \\ \text{PP} \\ \bar{S} \\ \overline{\text{VP}} \end{array} \right\} S$
- b. $S \longrightarrow \text{NP AUX VP} \left(\left\{ \begin{array}{c} \bar{S} \\ \text{PP} \end{array} \right\} \right)$
- c. $\text{VP} \longrightarrow \text{V (NP)} \left(\left\{ \begin{array}{c} \overline{\text{NP}} \\ \overline{\text{VP}} \\ \bar{S} \\ \text{PP} \end{array} \right\} \right)$
- d. $\text{NP} \longrightarrow \text{NP} \left(\left\{ \begin{array}{c} \bar{S} \\ \overline{\text{VP}} \end{array} \right\} \right)$
- e. $\text{NP} \longrightarrow \text{SPEC N}$
- f. $\text{PP} \longrightarrow \text{P } \overline{\text{NP}}$
- (2) ((1e) に代わるものとして)
 - a. $\text{NP} \longrightarrow \left(\left\{ \begin{array}{c} \text{DET} \\ \text{POS} \end{array} \right\} \right) \bar{N}$
 - b. $\bar{N} \longrightarrow (\text{SPEC}) \text{N}$
 - c. $\text{SPEC} \longrightarrow (\text{DET}) \text{Q}$

Brame (1978) は、(1), (2)に代表されるような句構造規則によってすべての構造が基底で生成され、従っていかなる変形規則も存在しないと主張している。このことから言わば当然の帰結として、次のような立場が出てくる。

- (3) In what follows, I would like to take what I consider to be a natural next step. Let us eliminate the phrase structure rules in favor of a still more surface approach. We will then provide a set of rules of composition in accord with the suggestion in Brame (1978). We will then be working directly off the surface strings of lexical items, or more accurately, of phonological words. Within such a theory, it is no longer possible to simply gloss over lexical specifications of the words that play a role in the analysis. Rather, lexical specifications must be provided to ensure the proper functioning of the grammar as a whole.
- (Brame (1979, p. 29))

すなわち、(3)において、変形規則が存在しないということから生じる次の段階として、基底での生成ということ自体を廃止している。そして、基底部規則の中核をなした句構造規則が廃止され、さらに深層構造という表示のレベルも存在理由がなくなり、上記のような ‘surface approach’ へと続くのである。

Brame の方法で顕著な点は lexicon への全面的な依存である。彼の述べる通り、“lexical specifications must be provided to ensure the proper functioning of the grammar as a whole” ということが彼の文法の根幹を成している。これは、Chomsky が個別文法における規則の適用及び非文法性の説明に関して、個々の語彙項目の情報への直接の依存を極力回避しようとしているのと対照的である。このことは、我々が Brame の文法に対して言語習得の説明を望み得ないとの印象を与える。以下に、説明よりは記述しかかっていないと思われる例をあげる。

Brame (1979, p. 55) は (4 a-g) の非文法文を説明するのに (4 h) のような規則を提案している。¹⁾

- (4) a. * Who did you give a book?
 b. * John would be easy to give a book.
 c. * This boy John gave a book.
 d. * the boy who John gave a book.
 e. * It was John that Bill gave a book.
 f. * I asked who John gave a book.
 g. * The boy, who John gave a book, is my friend.
 h. Set $x=o$, $p[\text{dir}]$, $p[\text{loc}]$, $p[\text{man}]$, \dots , $s/(F^x \text{---})$ A

(4h) は註1)の(ii)規則に補足されたもので、operator suffix (註10)を参照)の $A^{n(x)}$ の x の値を決定する役割を果たす。Brameによれば、 x の値に *dat* は存在しないので、例えば (4a) の *who* の operator suffix として $A^{n(\text{dat})}$ は許されない。よって、(4a) の文の解釈は成り立たない。(4b-g) に関しても同様のことが言える。しかし、このことは何ら原則的な視点から説明されているわけではない。様々な operator の持つことのできる operator suffix の値を数えあげて、目録 (catalogue) を作っただけである。これは、言い換えれば、(4h) が単なる記述から一歩も出ていないことを示していると思われる。

2. Crossover の場合

次の基本的な例を考えてみよう。

- (5) a. who_i did he say Mary had kissed t_i
 b. who_i did he say t_i had kissed Mary
 c. who_i t_i said Mary had kissed him
 d. who_i t_i said he had kissed Mary

(5 a, b) において、*who* と *he* は離接指示的 (disjoint in reference) であり、(5 c, d) における両者の関係は自由指示的 (free in reference) である。²⁾ Brame (1979, p. 46) は、Lasnik (1976) の 'Noncoreferentiality Rule' を採用して、次のような規則を設け、'Anaphora' と呼んでいる。³⁾

(6) Anaphora

Let i and $A^{y(x)}$ be included in a partial interpretation φ . Then index $A^{y(x)}$ as i provided the following conditions hold:

- (i) i indexes $A^{y(z)}$ for some z
- (ii) $A^{y(x)}$ does not precede and command $A^{y(z)}$ in the tree associated with φ ⁴⁾

注意すべきことは、Lasnik (1976) の規則が ‘noncoreferentiality rule’ であるのに対して、(6)は事実上 ‘coreferentiality rule’ であることである。代名詞と名詞の(非)同一指示性を問題にする場合の重要な特質が「義務的な離接指示性」(‘obligatory disjoint reference’) であることはよく知られている。(6)によっては、次のような基本的な例さえも説明するのが困難であることがわかる。

- (7) a. Harry likes him.
- b. Harry wants Mary to like him.
- c. Harry thinks that he will win.

(6)によれば(7 a-c)の *Harry* と *him (he)* はすべて同一指示的となる。⁵⁾ しかしこれは母国語話者の言語直観に反する。(7 a-c)の正しい判断は、(7 a)が離接指示的、(7 b-c)が自由指示的である。これは、代名詞と名詞の(非)同一指示性を扱うのに、‘noncoreferentiality rule’ ではなく ‘coreferentiality rule’ を採用した当然の結果であろう。

次に(5 a-d)の分析に移ろう。(6 i)によって(この場合は事実上 ‘Operator Binding’ が(6 i)の操作を行なう)⁶⁾、部分的な機能構造において(5 a-d)の痕跡に該当する arguments が lexicon からの情報を得て補充される。注意すべきことは、Brame において機能構造は丸括弧付の種々の index 間の関係で表わされるのに対して、(6 ii)に現われる ‘command’ は標示付き括弧 (labeled bracketing) あるいは樹形図 (tree diagrams) に関して定義される関係だということである。もっとも Brame の機能構造を標示付

き括弧あるいは樹形図と等価 (equivalent) と見ることも全く無理なわけではない。しかし、そうした見方を取ったとしても、(6)は(5 a-d) に対して全く正しい予測を立てられるわけではない。(6)は(義務的規則とした場合)、(5 a, b) に関してはほぼ正しい予測をするが、(5 c, d) に関しては正しい予測が自由指示的であるのに対して、同一指示的であるという間違った予測をしてしまう。(6)を随意的規則とした場合も完全には正しい予測は得られない。(註5)を参照。) また、Brame は(6ii)で“…in the tree associated with φ ”と述べているが、‘surface strings’のみから出発する彼の‘tree’は、(5 a-d)の機能構造には含まれ得る *who* の痕跡に該当する argument を含み得ない。よって、‘tree’を問題にする限り、*who* だけに言及せざるを得ないので、註6)で述べたような全く言語直観とは相容れない予測を立てざるを得なくなる。一方、この‘tree’を標示付き括弧あるいは樹形図と等価としての機能構造であるとしても、上記に述べた通り完全には正しい予測は得られない。

なお、(5 a-d)の正しい予測に関しては、Lasnik (1976)の‘Noncoreferentiality Rule’と痕跡理論を採用すれば簡単に説明がつくがここでは省く。”ただ注意すべきことは、この分析ではBrameが‘ad hoc theoretical elaboration’ (Brame (1981) など)と呼んでいるものの中に入ると思われる痕跡が crossover の場合の説明に重要な役割を果しているということである。

3. 語彙指定 (Lexical Specifications) について

次の例を考えてみよう。

(8) the boy pictures of whom John took

Brame (1979, p. 83) は *whom* の語彙指定を次のように行なっている。

(9) $\text{whom}; A^{n(x)}, \text{F}^{\text{rel}}(\text{F}^{\text{p}}(____))(A^s)^{8)}$

(9)は(10)のような例に該当する。

(10) the man with whom I talked

しかし、(9)は(8)を記述することができない。(8)のためにはおそらく次のような語彙指定が必要となるだろう。

(11) whom ; $A^{n(x)}$, $F^{rel}(F^{nom(x)}(Fp(____)))(A^s)^{9)}$

さらに次の例も考えてみよう。

(12) a. Arguments with which people satisfy you?
(Jackendoff (1977, p. 61))

b. Reports the height of the lettering on the covers of which
the government prescribes should be abolished.
(Ross (1967, p. 10))

(12a, b) の *which* に対して、それぞれ概略下記のような語彙指定が必要となるだろう。

(13) a. which : F^{det} , $F^q(F^{nom(x)}(Fp(____(A^{nom(x)})))))(A^s)^{(q)}$
b. which : $A^{n(x)}$, $F^{rel}(F^{det}(F^{nom(x)}(Fp(F^{det}(F^{nom(x)}(Fp(F^{det}(F^{nom(x)}(Fp(____)))))))))))(A^s)$

すでに明らかなように、言語運用への配慮を度外視するならば、*which* の語彙指定の数を予測することは不可能であろう。もう一つの例を考えてみよう。

(14) my mother's father's brother's car

brother's の語彙指定は次のようになるだろう。

(15) brother's ; $A^{nom(s)}$, $F^{pos}(F^{pos}(F^{pos}(F^{pos}(____(A^{nom(x)}))))))$

この例も、*brother's* (よって、すべての ~'s 形) の語彙指定の数が容易には予測できないことを示している。これらのことは、Brame の語彙指定の方法に重大な問題があることを表わしている。そして、Brame が説明的理論を

求めるならば、この語彙指定の氾濫とその descriptive power について根本的に再考することが必要であろうと思われる。

4. \bar{S} と \bar{VP}

近年, *to* 不定詞の構造に関して二つの大きな考え方がある。それらを \bar{S} 仮説と \bar{VP} 仮説と呼ぶことにする。次の例を考えてみよう。

- (16) a. John tried to leave.
b. John is likely to leave.

(16a, b) に対して、概略、 \bar{S} 仮説は (17a, b), \bar{VP} 仮説は (18a, b) の構造を付与する。

- (17) a. John tried [\bar{s} [_{COMP} e][_S PRO to leave]]
b. John _i is likely [\bar{s} [_{COMP} e][_S t_i to leave]]

- (18) a. John tried [\bar{VP} to leave]
b. John is likely [\bar{VP} to leave]

Brame は \bar{VP} 仮説を採用しているが、次の例は参考文献としてあげた範囲内では必ずしも明確には取り扱われていない。

- (19) a. a topic to work on
b. a topic on which to work
c. *a topic which to work on

Brame (1979, p. 82) によれば、関係詞節を含む構造において lexical head と operator suffix¹⁰⁾ との一致 (identification) は ‘rule of anaphora’ によって行われる。まず (19b) を考えるが、*which* の語彙指定は下記のようになる。

- (20) which ; A^{n(x)}, F^{rel}(F^p(____))(A ^{\bar{VP}})

(19b) の解釈は概略, Brame (1979, p. 82) の (56)¹¹⁾ (この場合は不定詞構文を含まないので, (19b) の解釈の細部にわたっては判然としない部分もある) に従って行なわれるものと考えられる。次に (19c) を考えるが, 次の例に注意してみよう。

- (21) a. I don't know which to buy.
b. This is the topic which Bill worked on.

(21a, b) の *which* の語彙指定は, それぞれ (22a, b) のようになる。

- (22) a. which; $A^{n(x)}$, $F^q(__)(A^{\overline{vp}})$
b. which; $A^{n(x)}$, $F^{rel}(__)(A^s)$

一方, (19c) の *which* の語彙指定は次のようになる。

- (23) which; $A^{n(x)}$, $F^{rel}(__)(A^{\overline{vp}})$

しかし, (19c) が非文法的であるので, おそらく (23) は *which* の語彙指定としては存在しないだろう。だが, 次の四つの *which* の語彙指定を考えてみよう。

- (24) a. which; $A^{n(x)}$, $F^q(__)(A^s)$
(I don't know which he bought.)
b. which; $A^{n(x)}$, $F^q(__)(A^{\overline{vp}})$ (= (22a))
c. which; $A^{n(x)}$, $F^{rel}(__)(A^s)$ (= (22b))
d. *which; $A^{n(x)}$, $F^{rel}(__)(A^{\overline{vp}})$ (= (23))

何故 F^{rel} には (24c, d) のような asymmetry が存在するのか。Brame ならば即座に, (24d) が存在しないからだ, と言うだろう。しかし, これは語彙指定という万能 (ノ) の装置 (device) に名を借りた単なる記述ではないだろうか。このことは, 生成意味論派が変形万能主義に陥り, 説明的理論を望め得なくなったのに状況がよくにている。次に (19a) を考えてみよう。Brame

(1979, p. 82) は (25a) の解釈のために (25b) の規則を提案している。

- (25) a. the men John met
 b. $\phi \rightarrow \text{F}^{\text{rel}}(\text{A}^{\text{n}(\text{x})})/\text{NP} \text{ ____ } \text{S}$

(19a) の解釈にも同様な規則が必要であろう。しかし、(19a) のためにはその規則は次のようにならざるを得ない。

- (26) $\phi \rightarrow \text{F}^{\text{rel}}(\text{A}^{\text{n}(\text{x})})/\text{NP} \text{ ____ } \overline{\text{VP}}$

(25b) の他に (26) が必要となるのは、 $\overline{\text{VP}}$ 仮説を採用した結果である。(この種の $\overline{\text{VP}}$ 仮説の好ましくない影響については Koster and May (1981) を参照のこと。) 次に (27) を考えてみよう。

- (27) a. We'd prefer *for John to leave*.
 b. I think *that he is honest*.
 c. I don't know *who ate rice*.
 d. a topic *to work on* (= (19a))
 e. a topic *on which to work* (= (19b))
 f. This is the topic *which Bill worked on*. (= (21b))
 g. This is the topic *on which Bill worked*.
 h. the man *John met* (= (25a))

Brame (1981, p. 284) は “……where this category must be refined to incorporate the distinctions between the different types of \bar{S} phrases” と述べ、 \bar{S} には様々の type があることを示唆している。(27a) の *for John to leave* は $(\text{P}^{\circ}(\text{NP}^{\text{p}}))(\overline{\text{VP}}) \equiv \bar{S}$ である (Brame (1979, p. 102, 1981, p. 278 fn. 2) を参照)。(27b) の *that* 節は $(\text{C}(\text{S})) \equiv \bar{S}$ である (Brame (1979, p. 82) を参照)。(27c) の *who ate rice* は、Subject Interpretation (Brame (1979, p. 57 (120))) の後に、 $\text{F}^{\text{a}}(\text{A}^{\text{n}(\text{x})})(\text{S}) \equiv \bar{S}$ となる。(27e) の *on which to work* は、 $(\text{F}^{\text{rel}}(\text{F}^{\text{p}}(\text{A}^{\text{n}(\text{x})}))(\overline{\text{VP}})) \equiv \bar{S}$ となる (Brame (1979,

p. 102 (128)) を参照)。(27f) の *which Bill worked on* は $(F^{rel}(A^{n(x)})(S)) \equiv \bar{S}$ となるが、(27g) の *on which Bill worked* は $(F^{rel}(F^p(A^{n(x)}))(S)) \equiv \bar{S}$ とならざるを得ない。そして、(27h) の *John met* はそれ自体は S であるが、rule of anaphora によって lexical head と関係づけられるためには、(25b) の規則を経て「一種の」 \bar{S} とならなければならないだろう。何故なら、rule of anaphora は一般的に、関係詞構文を含む解釈において lexical head と後続する \bar{S} に含まれる operator suffix とを一致させる規則だからである。よって、*John met* は、(25b) の適用の後に $(F^{rel}(A^{n(x)})(S)) \equiv \bar{S}$ となるだろう。これは (27f) と同じである。このことは、(27f) と (27h) の surface strings の違い (関係代名詞の有無) にかかわらず、rule of anaphora のような一般的な規則が二つの構造の類似性 (この場合は NP \bar{S}) を明らかにしてしまうことを示している。そしてさらに、(25b) のような規則は、surface strings から出発したがための全く ad hoc な規則と言わざるを得ない。最後に (27d) を考えて見よう。Brame 自身この種の構文について明確に述べていないので細部にわたっては判然としない部分もあるが、まず言えることは、(27d) も rule of anaphora によって扱われるべき関係詞構文の一つであるということである。すなわち、このままでは lexical head との解釈が得られないので (26) の規則を使わざるを得ない。結果は、 $(F^{rel}(A^{n(x)})(\overline{VP}))$ となるが、これは Brame (1979, p. 102 (128)) の例に従って \bar{S} と考えることができると思われる。 \overline{VP} 仮説に従えば *to work on* は明らかに \overline{VP} であるが、他の規則との相互関係から考えた場合、同じ *to work on* を構造的には \bar{S} と扱かわざるを得ない。このことは \overline{VP} 仮説の皮相さを物語っている。以上 (27) の例で見えてきた様々な 'type' の \bar{S} の氾濫は \overline{VP} 仮説の不自然さと Brame の語彙指定の方法の恣意性を示しており、また (25b), (26), 及び Subject Interpretation の存在は surface strings のみから出発することの非妥当性を示している。¹²⁾

註

* 本論文の執筆にあたり、名古屋大学の小野経男教授と中野弘三助教授、及び同大学大学院の丹羽卓氏に、貴重な御助言と御批判をいただいた。ここに深く感謝する次第である。

1) 例えば、Brame は (ia) を (ib) のように解釈する。

(i) a. Who did you see?

b. 1) $(F^a(A^n(x)))((F^v(A^n(o))))(A^n(s))$ by Composition

2) $(F^a(x))((f(A^n(o))))(j)$ by indexing

3) $(h(x))((f(x)))(j)$ by Operator Binding

where $x=who$, $f=see$, $j=you$

また、Brame (1979, p. 55) では、(ii)の規則に (4 h) が補足されている。

(ii) Let $A^n(x)$ be the composition of some phonological string.

a. Set $x=s/_$ F^vP

b. Set $x=o/F^v_$ or $F^vA^n(x)_$

c. Set $x=dat/F^v_$

2) 「*who* と *he* の (非) 同一指示性」などのような言い方は、*who* が referential expression ではないのであまり意味がないが、ここでは便宜的にこの言い方を採用する。(Chomsky (1975, p. 100) などを参照)

3) Noncoreferentiality Rule (Lasnik (1976, p. 16)):

If NP_1 precedes and kommands NP_2 and NP_2 is not a pronoun, then NP_1 and NP_2 are disjoint in reference.

4) ' $A^v(x)$ において A は 'argument word' のことであり、 y は主に範疇指定を示し、そして $[x]$ は主として文法機能を表わしている。また、後に出てくる F は 'function word' のことである。

5) これは、(6)を義務的な規則とした場合の結果である。一方(6)を随意的な規則と考えよう。(7 a) に関しては(6)が適用されない場合正しい解釈が得られ、(7 b, c) に関しては、適用、不適用にかかわらず、部分的な予測しか得られない。個々の場合の適用、不適用を指定するのは説明的理論においては事実上不可能であり、また Brame のわく組にはこれを予測する一般原則も存在しない (index 付与に関しては、Brame (1979, p. 78) を参照)。

6) Operator Binding (Brame (1979, p. 34)):

Let $F(a)$ be an operator with index a and let $(...T...)$ be its scope, where T is a term in the accessible scope of $F(a)$ and of the same type as that indexed by a . Then identify T with a and index F .

- 我々はまた、(6i) の 'for some z ' の z を argument が取り得る文法機能 (grammatical functions; subject, object, etc.) の一つと考える。 z をそのように制限しなければ、(6)による (5a-d) の予測はさらに言語直観とは相容れなくなる。つまり、*who* をそのまま (6i) の i の index を持つものとした場合、(5a-d) の *who* と *he* (あるいは *him*) の関係はすべて同一指示的となってしまう。
- 7) Lasnik (1976) の 'Noncoreferentiality Rule' (註3) を参照) はそのままでは (7a) を正しく予測できない。disjoint reference の問題に関しては、Chomsky (1980) の 'anaphoric index' を使った分析などを参照のこと。
- 8) Brame (1979, p. 83) の原文では次のような略式の書き方が採用されている。
whom; NP^x, F^{re1}(P(…)) (S)
- 9) Brame は名詞の補部 (complements) に関して必ずしもはっきりとは述べていないが、*of whom* が *pictures* の補部をなすと考えるのは妥当だと思われるので、F^{nom(x)} のようにFを採用した。なお、Brame (1978, pp. 72-73) を参照のこと。
- 10) operator の一般的な形を F^x(A^{y(z)}) とした場合、F^x を 'operator prefix' と言い、A^{y(z)} を 'operator suffix' という。
- 11) Brame (1979, p. 82 (56)) は *the man that John met* の解釈を次のように与えている。
NP^x ; i where i=*the man*
(F^{re1}(NP^x)) ((V(NP^o)) ((NP^s)): F^{re1}(x) ((f(NP^o)) (j))
where x=*that*, f=*met*, j=*John*
上記に Operator Binding と rule of anaphora がかかり、解釈が完了する。
- 12) (27) の例に関しての語彙指定の書き方は概略、引用してある文献に従った。

参 考 文 献

- Brame, M. (1976) *Conjectures and Refutations in Syntax and Semantics*
Elsevier North-Holland, New York
- Brame, M. (1978) *Base Generated Syntax*, Noit Amrofer, Seattle
- Brame, M. (1979) *Essays Toward Realistic Syntax*, Noit Amrofer, Seattle.
- Brame, M. (1980) "hope," *Linguistic Analysis* 6, 247-259
- Brame, M. (1981) "Trace Theory with Filters vs. Lexically Based Syntax Without," *Linguistic Inquiry* 12, 275-293
- Bresnan, J. (1978) "A Realistic Transformational Grammar," in M. Halle, J. Bresnan, and G. Miller, eds., *Linguistic Theory and Psychological Reality*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts

- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts
- Chomsky, N. (1972) *Studies on Semantics in Generative Grammar*, Mouton, The Hague
- Chomsky, N. (1975) *Reflections on Language*, Pantheon, New York
- Chomsky, N. (1980) "On Binding," *Linguistic Inquiry* 11, 1-46
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht
- Chomsky, N. and H. Lasnik (1977) "Filters and Control," *Linguistic Inquiry* 8, 425-504
- Fiengo, R. (1980) *Surface Structure*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts
- Hoekstra, T., H. van der Hulst, and M. Moortgat, eds. (1980) *Lexical Grammar*, Foris, Dordrecht
- Hornstein, N. and A. Weinberg (1981) "Case Theory and Preposition Stranding," *Linguistic Inquiry* 12, 55-91
- Jackendoff, R. (1977) \bar{X} *Syntax: A Study of Phrase Structure*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts
- Kac, M. (1980) "A Review of Brame's *Base Generated Syntax*," *Language* 56, 855-861
- Koster, J. and R. May (1981) "On the Constituency of Infinitives," Occasional Paper #16, MIT
- Lasnik, H. (1976) "Remarks on Coreference," *Linguistic Analysis* 2, 1-22
- Ross, J. (1967) *Constraints on Variables in Syntax*, Doctoral dissertation, MIT